

語学研修生を対象とした  
アメリカン・ソーシャルスキルの学習

高 濱 愛・田 中 共 子

静岡大学『国際交流センター紀要』第4号（2010年3月）抜粋

# 語学研修生を対象としたアメリカン・ソーシャルスキルの学習

高 濱 愛・田 中 共 子

## 【要 旨】

アメリカの大学における語学研修に参加予定の日本人学生に、留学準備教育として、アメリカ滞在に有用と考えられるソーシャルスキルの学習セッションを実施した。本稿ではその概要と参加者の反応について報告する。参加者は4名の学部生で、アサーションなど4つのアメリカン・ソーシャルスキルを、各2回ずつのロールプレイを行いながら学習した。参加者による振り返りの自由記述によれば、彼らは自分のパフォーマンスを改良する努力をしていた。彼らは、人と接する際の心構えや状況の捉え方などの認知を、よりの確で効果的なものに代えており、自らも演技の向上を実感したと報告している。さらにセッション前後での評定値の変化を見ると、学習の主題としたアサーションについて、その自信と重要性の理解が向上する傾向がみられた。本セッションによって、参加者の認知的及び行動的な文化学習が生じたことが示唆される。

【キーワード】 語学研修生、アメリカン・ソーシャルスキル、ロールプレイ、セッション

## 1. はじめに

我々は、日本の大学からアメリカの大学へ短期交換留学をする予定の日本人学生に、留学準備教育としてアメリカ滞在に有用なソーシャルスキルの学習セッションを開発し提供する試みを行ってきた（田中・高濱, 2008；高濱・田中, 2009a；高濱・田中, 2009c）。この試みの背景となっているのは、アメリカ留学中のソーシャルスキル使用と適応に関する先行研究である（Takahama, Nishimura & Tanaka, 2008）。そこでは、留学先の文化に即したソーシャルスキルの使用が、周囲の人からの有形・無形の支援であるソーシャルサポートの獲得につながり、留学先での適応を促進することが示唆されている。この考え方に即せば、ソーシャルスキルを留学前に学習して身につけておけば、留学中の適応をより良好なものにできるのではないかと期待される。

これまで我々が実施してきたアメリカン・ソーシャルスキルの学習セッションの参加者たちは、留学前に実施されたセッション参加によって、留学に対する不安が減り、留学してアメリカ人と交流する意欲が高まったと述べている。参加者の自己評価のみならず、セッションに協力者として参加したアメリカ人の学生も、参加者のパフォーマンスが向上したことを指摘しており、他者評価による向上が確認されている。すなわち自己評価と他者評価の観点から、セッションの効果が示唆されている。

さらに、縦断的研究のパラダイムに即して、留学中の参加者を留学先に訪ね、学習したスキルのパフォーマンスについて現地調査を実施した。セッション参加者の学生たちは、学習したスキル発揮の心構えを使っており、スキルを積極的に実施して、より多くのソー

シャルサポートを獲得していたことが明らかになった（高濱・田中, 2009b）。したがってソーシャルスキルの学習セッションに参加することで、留学先での適応を高め、アメリカ留学の質的充実を促すことが期待できる。

上記は短期留学の参加者に対して行われたセッションの報告であるが、今回は、より短期の滞在となる、アメリカへの語学研修留学を予定する日本人学生に、同様のセッションを実施した。本稿では、その概要と参加者の反応を報告し、この学習方法の意義と課題の検討を行いたい。語学研修は、気軽に海外を体験できる、人気の高い留学形態の一つであり、近年かなりの広まりを見せている。日本からアメリカへ渡る留学生を対象としたソーシャルスキルの学習の適用対象として、交換留学生に加えて、語学研修生を想定することは必要なことと考えられる。ここでは彼らの適応課題を鑑みて、従来のセッションで扱ったスキルに、新たなスキルを加えてセッションを構成した。

## 2. 方法

### 2. 1 学習参加者

日本のP大学に在籍中で、アメリカのQ大学で語学研修予定の、19歳から22歳までの日本人学部生4名（S15、S16、S17、S18）が、アメリカン・ソーシャルスキル学習セッションに参加した。S15は男性、S16、S17、S18は女性である。研修予定期間は、S18が4ヶ月、S15、S16、S17は2ヶ月である。全員セッション参加後1ヶ月以内に、語学研修を開始予定であった。セッション受講以前に、1ヶ月以上の海外滞在経験を有するものはいない。なお、欧州に短期交換留学予定の2名も、学習の参考のためとして参加していたが、分析の対象からは除いた。

### 2. 2 手続き

P大学において200X年某月の連続する2日間、教養としてのアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションと称して講座を設定した。セッション開始に先立ってP大学の留学予定者に概要を説明し、参加希望者を募った。講師は、本稿第一筆者と第二筆者の2名が務めた。セッションのアシスタントとして、Q大学に短期留学の経験のある、日本人女子学生2名を雇用した。またネイティブの立場からの意見を聞くため、Q大学からP大学に留学中のアメリカ人女子学部生1名に、ボランティアとして協力してもらった。セッション実施の要領は、基本的には田中ら（2008）になった。まず学習方法を説明し、課題場面を示し、英語で自由に1回目のロールプレイをしてもらった。その後、ロールプレイのビデオを再生しながら、参加者やネイティブの学生から肯定的なフィードバックを受けた。そして講師が行動の要領を説明し、助言を行った。続いて2回目のロールプレイを行い、フィードバックを経て総括へ進んだ。ビデオカメラ2台で、演技と教室全体の記録を撮影した。セッションでは演技の映像を再生して、フィードバックに用いた。セッションの1日目は、用意しておいた初級スキル2個、すなわちスキル1：自己紹介する・聞く態度（笑顔、アイコンタクト）、スキル3：友人を作る、を学習した。2日目には、初日にアシスタントの学生が語った、留学先での実話に対応させて設定した、中級スキル2個、すなわちスキル7：交渉する、スキル11：語学のハンディを持って話す、を学習した（表1）。

1つのスキルにつき、およそ1コマ（90分）を割り当てた。セッション中の言語は、主に日本語であったが、ネイティブとの会話の際などに適宜英語を使用した。

表1 学習セッションで扱ったソーシャルスキルとその内容

<p><u>スキル1「自己紹介する・聞く態度（笑顔、アイコンタクト）」</u>                  場面：1分ほどの短い自己紹介をする。自分の番以外の時は、他の人の自己紹介をよく聞く。                  要領：他人の話をよく聞き、聞いている時は、笑顔とアイコンタクトを忘れないようにする。言語表現だけでなく、非言語的成分のメッセージ性にも注意を払う。アイコンタクトなど、アメリカ文化で期待される言動に関して、日本との文化的相違を理解したうえで、自分の言動を意識的に選ぶ。</p> <p><u>スキル3「友人を作る」</u>                  場面：いつも同じ授業を受けている学生と友達になるために、自分から積極的に話しかけてみる。                  要領：友達を作るためには、自分から気軽に声をかけてみる。話題のはじめとして、自分のことから先に話す、つまり自己開示することが大切である。</p> <p><u>スキル7「交渉する」</u>                  場面：不良品の購入に関して、店員に交換を求める。                  要領：アメリカでは、日本よりもアサーション（自己主張）が自然で当然のことと考えられているので、積極的に交渉・主張してみる。不良品の交換は、正当な主張であると考え、店員に明確に事実を伝えながら、可能な対応を落ち着いて話し合う。</p> <p><u>スキル11「語学のハンディを持って話す」</u>                  場面：携帯電話の契約をしたいが、店員の英語が速くて聞き取れないときに、その話を止めて、自分の知りたい情報を確認する。                  要領：相手の英語が早すぎて聞き取れないときは、まず相手の話を一度止めてもらってから、話がよく分かっていないことを伝え、ゆっくり話してくれるように要求する。携帯電話など、契約するときにはよく理解してからサインしないと後でトラブルのもとになることもあるので、気後れせずに質問する。</p>
--

本セッションが、田中ら（2008）など従来のセッション実施方法と異なる点は、1）スキル11の学習課題を新たに創作したこと、2）スキル11は文献に基づくものではなく、先輩留学生の体験と助言を素材に作成したこと、の2点である。

### 2. 3 分析方法

各スキルの学習後に、2回目の演技はどのようにしようとしたか等、学習者による演技の意図や自己評価を、記録用紙に記入してもらった。また評定法を用いて、留学に関する

意識の変化(12項目)も測定した(表2)。ネイティブの学生には、セッションの感想や意見の自由記述を求めた。さらにセッションの様子を録画したテープをもとに、セッションの逐語録を作成し、分析を行った。

表2 記録用紙

**【演技の自己評価項目】**

1. 1回目の/2回目の自分の演技を評価してください  
(全くできていない・0～完全にできている・10)
2. 1回目と2回目の演技を比べて、どこが違いますか  
①自分の演技について②自分の気持ちについて
3. 2回目のとき、どのようにしようと思いましたか
4. 3回目ができるなら、どのようにしたいと思いますか

**【留学に関する意識の評価項目】**

以下の項目にどれくらいあてはまるか(全くそう思わない・1～完全にそう思う・10)

- 1) 留学先の人々と積極的に交流したいと思う
- 2) 留学先での大学生活に不安を感じている(\*ネガティブ項目)
- 3) 留学先でうまく友人が作れるか心配している(\*ネガティブ項目)
- 4) 留学先でのコミュニケーションに自信がある
- 5) アメリカの文化と日本の文化の違いについて熟知している
- 6) アメリカ人のものの見方や考え方についてよく分かっている
- 7) アメリカ人の行動のしかたについてよく分かっている
- 8) アメリカの文化について詳しく知りたいと思う
- 9) アメリカではアサーション(主張)することが非常に大切だと思う
- 10) 英語を使って上手くアサーション(主張)ができると思う
- 11) (日本で日本語を使っているとき) 普段からはっきりと自己主張する方だと思う
- 12) (日本で日本語を使っているとき) 自分は普段から遠慮しない方だ

**【セッション終了時の全体評価】**

- 1) このセッションで何を学びましたか
- 2) ここで学んだことを、これからの留学生活でどう使おうと考えていますか
- 3) またソーシャルスキル学習の機会があったら、何を学びたいですか
- 4) 今回のセッションを通して、日本文化と比べて、アメリカ文化における対人行動が最も違うと思われる点はどんな点ですか
- 5) セッションの内容を評価してください。このセッションはあなたの留学準備の役に立ちましたか。(全く役に立たなかった・1～大いに役に立った・5)
- 6) セッションの感想を書いてください

### 3. 結果

#### 3. 1 評定値からみたセッション前後の認知的変化

セッションの開始直前と終了直後、留学に関する意識およびアメリカ的な行動や日米の文化差に関わる認識について自己評定（10段階）を求めた（表3）。4名が示した12項目における変化は、留学への意識や自己認識の好転が14箇所、悪化は11箇所、天井効果による無変化が7箇所、天井効果を伴わない無変化が16箇所であった。総じて、交流意欲と文化学習意欲（項目1と8）の天井効果、主張の自信（項目10）の好転、日頃の遠慮のなさ（項目12）の評価の低下が顕著であった。なおS15、S17、S18は高評価での無変化や好転が比較的多くみられた。

表3 セッション前後における留学と文化に関する意識の変化

項目内容	S15	S16	S17	S18	項目毎の変化		
	前→後	前→後	前→後	前→後	好転	不変	悪化
1. 積極交流	10→10	9↓8	10→10	10→10	0	3	1
2. 留学の不安	3→3	6→6	8→8	8→8	0	4	0
3. 友人作りの心配	3↓2	6↑7	6↓4	8→8	2	1	1
4. コミュニケーション自信	6↓4	4↑5	4↓3	4↑6	2	0	2
5. 文化差熟知	1→1	4→4	3→3	4↑7	1	3	0
6. 認知の理解	1↑2	6↓5	2→2	4↑7	2	1	1
7. 行動の理解	1→1	6↓5	3→3	4↑6	1	2	1
8. 文化学習意欲	10→10	9→9	10→10	10→10	0	4	0
9. アサーション重要性意識	7↑9	9→9	8↑10	10→10	2	2	0
10. アサーション自信	3↑4	4↑5	2↑4	7→7	3	1	0
11. 日頃の自己主張	9→9	4↑5	6↓4	6→6	1	2	1
12. 日頃の遠慮のなさ	5↓4	5→5	4↓3	6↓5	0	1	3
学習者毎の変化	好転	4	3	3	4		
	不変	6	5	6	7		
	悪化	2	4	3	1		

項目2と項目3は、ネガティブな内容、他はポジティブな内容の項目である。

評定値の変化方向として、太字は好転、斜字は悪化、太字と斜字以外は不変のセルであることを示す。

#### 3. 2 自由記述からみたセッションでの認知的反応

1回目の演技と2回目の演技で変わったと思う点を尋ねたところ、全員が2回目の演技において様々な変化を実感していることが分かった（表4）。質問紙では、演技と気持ちについて別個に尋ねているが、明確に分類せずに記載している参加者が多かったため、まとめて分析した。変化は、自分の要求・状況を具体的に伝えるといった言語面と、笑顔や

視線といった非言語面の両面に及んでいる。回答の中には「緊張した」「焦った」「具体的な内容を話せなかった」など、ネガティブな記述も散見されるが、これらは彼らの向上心の表れと理解することもできよう。演じる際の気持ちの面では、2回目の方が余裕や落ち着きを持ってできたと言われている。

表4 1回目と2回目の演技で変わったと思う点

2回目で変わった点	学習者			
	S15	S16	S17	S18
スキル1	具体的に、より多くのことを話そうとした。	だいぶ落ち着いてゆとりができ、みんなの目を見て話しかけられた。	話がスムーズになった。 <u>緊張した。</u>	笑顔や視線などが上手く出来た。フィードバックを受け、自信を持って演じられた。
スキル3	自然な流れにしようとした。話す内容を予め準備できて気が楽だった。	緊張したが、笑顔で話すことができた。考えて話せるようになった。	少し余裕をもてたが、 <u>具体的な内容を話せなかった。</u>	比較的よくなった。緊張がやわらぎ、より自然に臨めた。
スキル7	少し表情に気がつけた。少し気が楽になった。	想定外の対応が返ってきたとき、 <u>すぐ対応できなかった。</u> 慣れてきたし、パターンも限られていたので、落ち着いてできた。	スムーズになった。 <u>落ち着いて、状況の説明ができた。</u>	相変わらず発音が悪いが、 <u>表現も分かり自信をもって言うことができた。</u>
スキル11	自分の状況、要求、疑問について具体的に <u>なった。</u> 何と云えば良いのか分かり気が楽になった。	1回目は分からないとすぐあきらめてしまったが、2回目は聞きたいことをきちんと聞けた。 <u>相手の言っていることが分からないと不安になったけれど、気後れせず話せた。</u>	わからないことを質問できた。 <u>相手の話が理解できずに焦った。</u>	1回目はよく分からないままOKしてしまったが2回目はきちんと聞くことができた。2回目は1回目より自信をもつことができたけど <u>まだもじもじしていてだめだと思った。</u>

斜字は非言語、他は言語に関連が深い事柄。下線部はネガティブな内容。

次いで、2回目の演技で意識した点を聞いたところ、全員が様々な工夫を凝らしていた(表5)。スキル1は、具体的に言う、話を掘り下げる、笑顔と視線に注意する。スキル3は、自然にする、積極的にする、具体的に言う、話題をふくらませる。スキル7は、表

情に気をつける、表現パターンを工夫する、具体的に言う、詳しく説明する、的確な語彙を使う。スキル11は、状況を伝える、明確に説明する、分からなければ聞き返す。概して参加者は、言語・非言語の両面に渡って、セッション中に得たアドバイスを活用していた。

表5 学習者が2回目の演技で意識した点

2回目の演技で意識した点	学 習 者			
	S15	S16	S17	S18
スキル1	具体的に。	みんなに話しかけるように。話を掘り下げるように。	表情をやわらかく。	自分の専攻を紹介する内容も加えようと思った。笑顔と視線に注意。
スキル3	相手と友達になるにはどういうシチュエーションが自然かを考えて実行しようとした。	話題に困ったが、積極的に話しかけ、自然に友達になれるように心掛けた。	自然に話せる話題にしようと思った。	話をふくらましたいと思い、具体的に話しかけようと思った。
スキル7	表情に気をつけた。	ボキャブラリーや表現のパターンを増やして、新しい言葉で伝えようと努力した。	なるべく具体的に要望を伝える。	状況説明を1回目より詳しくしようと思い、単語を増やした。
スキル11	しっかりと携帯を買おうとした。	ちゃんと、自分の状況を伝え、欲しいモノが手に入るようにした。	欲しいタイプについて明確に説明しようとした。	分からない時は聞き返し、安いものを要求しようとした。

斜字は非言語、他は言語に関連が深い事柄。

3回目の演技ができるならと仮定して、意欲や課題の認識をみると、全員が自分の演技をよりよいものにしていきたいという意気込みをみせていた(表6)。意欲は言語・非言語面に渡り、異なるバージョンで演じてみたいなどの幅広い関心も示されている。



表6 学習者による実施への意欲と残された課題

3回目への意欲と課題	学習者			
	S15	S16	S17	S18
スキル1	もっと視線を配る。	いろいろ話のきっかけとなるような話題を含みたい。	笑顔で堂々と話したい。	もっと自分を紹介したいと思った。聞き手の関心を集めるため、みんなに相づちなどを求める表現も加えたい。
スキル3	もっと準備をしておきたい。もっと表情をやわらかくしたい。	言葉がもっと流ちょうにでてくるようにしたい。相手が楽しくなるような話題づくりをしたい。	会話を広げたい。	アドレスや電話を自然な流れで聞いてみたい。
スキル7	違う物のバージョンもやりたい。	また違う表現でトライしたい。	アイコンタクトを増やす。	返金のパターンも出来るようになりたい。
スキル11	自分の要求について、もっと詳しく言いたい。	もっと、自分でも説明ができるくらいきちんと説明してもらって納得のいく買い物がしたい。	プリペイドの仕組みなど、わからないことをどんどん聞いてみたい。	もっと気持ちの面で自信を持ってやりたい。

斜字は非言語、他は言語に関連が深い事柄。

### 3. 3 自由記述と逐語録からみた、セッションの全体評価

セッション終了時の全体評価に関する自由記述を、表7にまとめた。項目1と2の回答から、セッションで学んだことを心構えとして、とりわけ気持ちの面で生かしたいと考えていることが分かる。今回のセッションの軸として強調された、主張（アサーション）の重要性については、項目4の回答から、S16、S17、S18の3名の理解が確認できる。項目5における、セッションの5段階評価は、「大いに役に立った（5）」が2名、「わりと役に立った（3）」が2名であった。「わりと役に立った」を選択した2名は、理由として学習の時間や場面数が少ないことを挙げており、これは学習意欲の表現とも言える。総じて、セッションへの評価は高いと解釈できよう。

表7 セッション終了時の全体評価

	学 習 者			
	S15	S16	S17	S18
1) セッションで学んだこと	自分の仕草を見ていて興味深かった。自分のクセが分かった。	積極的に話すこと。	起こりうる具体的な状況を体験できて、その際に役立つ表現などを学べた。	場面ごとの表現を学ぶことができたのはもちろん、気持ちの面でどのように取り組めばいいのかということが一番勉強になった。
2) 学んだことを留学生活にどう使うか	気後れせずに接していくように。	今回学んだことを生かし、留学を楽しみたい。	実際の生活の中で何度も使うと思う。	日常生活を通して、常にもじもじせず、自信を持ってのぞむ。
3) 次の機会には何を学びたいか	もっと多くの場面について学習したい。	トラブル対応のしかたなど。スラングについて。	待ち合わせの仕方など。	誘いの断り方など。
4) 今回のセッションを通して、日本文化と比べてアメリカ文化における対人行動が最も違うと思うところ	あいさつの習慣の違い。Thank youの使う頻度など。	自己アピール。	アメリカ文化の方がフランク。	日本人は相手に対してははっきり主張したりすることは少ないけどアメリカ人は主張の文化。一見きつく思えたりもするけど、Thank youをどんな時にでも使ってうまく対人関係を築いていると思った。
5) セッションの内容を評価(1・全く役に立たなかった～5・大いに役に立った)	3:具体的に困るような場面における対応についてはかなり勉強になったが、もっと多くの場面について勉強したかった。	3:時間が限られていたけど、とてもよい機会となりました。	5:具体的だったから。	5:このセッションがなかったら、日本での振舞のままアメリカでも行動していたと思う。文化差を調整することが大事だと学べた。また課題も見つかったのでよかった。

<p>6) セッションの感想</p>	<p>ビデオを撮るといのは、自分を冷静に観察するためにとっても良い方法だと思っ たし、ネイティブの方もいて非常に勉強になったが、もっと多くのシチュエーションでもっと多く英語を使ってみたかっ たと思っ</p>	<p>語学研修に行く前に同じ時期に行く子たちと、顔みしりになれたし、場面を想定したロールプレイがアメリカで役に立つと思っ</p>	<p>携帯の買い方など、体験できてとても良かった。今回参加して身につけたものをぜひ生かしたい。</p>	<p>はじめはビデオをとってそれを見て分析するというのが恥ずかしかったけど、少しずつ慣れていき、このやり方がこんなに効果的だということに気がついた。場面の状況が詳しく設定されているので、このセッションでやったことを留学してからそのまま使うことができそうだと思っ た。2日は短かった。もっとやればもっと自信をつけることができたかもしれない。あとは自分で頑張る。</p>
--------------------	---	--	---	---

セッション2日目の最後に、セッションを振り返って学習者と、米国留学経験者であるアシスタントの学生と、ネイティブ学生の三者が述べたコメントについて、要点を抜粋し、プライバシーにかかわる部分などに一部修正を加えて紹介する。総じてセッション参加の意義を前向きに捉えており、ビデオで演技を振り返るとい学習の仕方を役に立ったと感じる者が多いことが分かる。

S15：実際に起こりうる場面を設定して、自分はそれに対して対処しなければいけないので、すごくためになった。ビデオはとても緊張するが、見ていると自分のクセが分かったりしてちょっと面白かった。セッション前と変わったことは、場面とかを自分で考えて準備しておくといいいかなって思っ。難しかったことは、同じ授業をとっている女の人に話しかけること。日本でもしないから、どうやって話しかけたら良いのかと思っ。すごく頑張っ。もっと具体的な場面が増えれば、もっと安心できると思っ。

S16：1回海外に行った経験もあり、大丈夫と思っていたが、参加して改めて自分は英語がしゃべれないなと思っ。携帯電話の契約の件でも、自分の知りたい情報のために要求することが難しかった。今回行くときには、妥協せずにとんどん自分からいきたいと思っ。このセッションを体験してみ、実際に向こうでやっしていけるか「危機感」を持っ。参加してくれたネイティブは日本人と接する機会も多かっだろうし、結構今回は気を遣ってくれたのだろう。だが向こうに行ったら、私たちの文化の背景もわからずに、普通のスピードでバーッと話さだろう。前は日本人ばかりといたので、そんな経験はなかつた。今回はアメリカ人とちゃんと接してみたい。言いたいことが言えないもどかしさがあつた。

S17：今日やった携帯の課題にしても、自分がどういう情報を言ったらいいのかというのを全然考えていなかったの、実際に練習してみているいろんなことを学習した。ビデオで撮るっていうのがすごく緊張したが、最後の方は楽な気持ちでできた。慣れてきたというのもあるし、やるのが楽になってきたっていうのもある。実際に向こうで携帯を使いながら待ち合わせを決めるっていうのは、ちょっと大変じゃないかと思った。

S18：この会に参加して、はじめはすごく緊張したけど、振り返ることによって自分の悪いところとかがわかった。本当にビデオに撮ることが効果的だと思った。多分このセッションに参加していなかったら、日本での振舞いのままアメリカでも行動してしまっただろう。先生がおっしゃっていたように文化の差を自分で調整するっていうのが大切だと思った。考える時間がいつも少なかったのが大変だったけど、普通にあっちに留学したら一分すら与えられないし、今日の課題場面は難しかったけど、それはそれ。誘われる機会が多いけど、断りたいときはしっかり断るように、と先輩が言うのを聞いて、自分はちゃんと断れるかな、と思った。相手に失礼のないような断り方ができたらと思う。

ネイティブ：自信を持つことは大切。留学先の人はとても優しいから、みんなをきっと理解してくれる。心配しないで。神経質になりすぎないことが重要。もし困ったことがあったら周りの人に相談すれば、きっと助けてくれる。楽しんで来て。2日間通して、みんな上手になったと思った。今日は特にとても良くなった。昨日よりも今日のほうが、みんな自信を持っていてよかった。

アシスタント1：私はこういうセッションなしで行った。何も考えずに渡米した。留学生の友達がたくさんいたからしゃべれないことはなかったけど、最初の一週間はすごく暇で、ホストファミリーと過ごすしかなくて、喋ることさえ怖い状態だった。だから、これは役に立つ授業だと思った。危機感が芽生えたことは、よかったのではないかな。留学のアドバイスとしては、日本人の友達を作って帰らないほうが良いということ。日本語ばかり喋っている子を見て、お金がもったいないと思った。せっかく行っているなら、日本人で固まらないほうが良い、自分を追い込んでみるのもいいと思う。

アシスタント2：2日間みんなのサポートをする感じで参加したが、みんな意欲的でしゃべりたいという気持ちがでていてよかった。その意識を2日間で高められたと思うし、実際に役立つシチュエーションがたくさんあったし、これから行ってきっと役に立つと思った。私のときはなかったから本当にうらやましい。いいなあ、と思った。今日の学習がいいきっかけになったと思う。今日抱いた気持ちを忘れないで、頑張っていってほしい。アドバイスは、まずは楽しんでください、ということ。

#### 4. 考 察

本稿では、語学研修生を対象として実施したアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションの概要とその反応を報告した。我々がこれまで、短期交換留学生に実施してきた学習セッ

セッションは、語学研修生にとっても効果的だったといえるか、以下で考えてみたい。

セッション参加者は、2回の演技で行動を改良する努力をしており、笑顔やアイコンタクトを心がけることに加えて、あきらめずに質問したりするなどの心構えを持つに至っており、認知的な構えが効果的なものに代わっている。落ち着いてできた、自信を持って演じられるようになったなど、感情面での好転も報告している。すなわち、本セッションでは、参加者の認知的、感情的、行動的な変化を伴う文化学習が生じていることが示唆される。セッション前後での変化を見ると、学習の主題とされたアサーションの、「重要性」と「自信」は、好転または高評価で安定する傾向があり、学習の狙いは伝わったものと解される。ただし「文化差を熟知」した感覚は、上昇した者が一人のみで、二日間の学習では不十分なことが示唆される。「交流意欲」や「文化学習の意欲」は、参加者が留学予定者であるため、天井効果が起きやすかったと思われる。「留学の不安」は、生活や勉強など様々な事への心配を包括しており、セッションでの対人技能の練習だけでは変化しにくかったものと思われる。日頃の「遠慮のなさ」は、在米を想定した演技で不十分さを認識したために、評価を低めたと推測される。なお「認知の理解」「行動の理解」「友人作りの心配」は、好転と悪化の両例があるが、悪化は全てS16による。この学習者は否定的変化が目立ちがちだが、演技についての自由記述では学習自体は肯定的に捉えており、自分への要求水準の高さが、否定的な評定につながった可能性が考えられる。

セッション全体への評価をみると、ビデオ撮影した自分の演技を振り返るという学習形態に関して、歓迎し効果を感じている評価が多く見られた。また、「もっと多くの場面について学習したい」など、更なる意欲が垣間見える意見も多かった。本セッションで模擬的に体験した場面を、実際の留学先で是非使ってみたいという声も寄せられていた。総じて参加者たちは、本セッションを肯定的に受け止めていたといえる。

今回は語学研修生向けに、新しいスキルとして「語学のハンディをもって話す」を、セッション中の最後の課題場面として取り入れた。参加者は、「どんどん質問したい」などかなり意欲的に取り組んでいた。これは、留学経験者の実体験に基づいた課題場面だったために、実施への関心が高かったことと、最終場面だったため、セッション形式にかなり慣れてきていたことも影響していよう。こうした反応から、参加者の期待に添える学習内容が提供できたのではないかとと思われる。

今後は、留学経験者からの情報をさらに収集して、セッションで扱うのに適した課題場面のレパトリーを増やしていきたい。加えて、セッション参加者の留学中や留学後の適応の様子を探ることで、本セッションの有効性や教育としての可能性について、継続的に検討を続けていきたいと考えている。

#### 【謝辞】

本研究は、科学研究費補助金（萌芽研究19653099 代表者 高浜 愛）の助成を受けた。

#### 【付記】

本研究は、2009年5月31日に異文化間教育学会第30回大会において発表された。

【参考文献】

- Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008) "The Influence of Social Skills to Get Social Support on Adolescents during Study Abroad: A Case Study on Japanese Short-term Exchange Students," *Journal of International Student Advisors and Educators*, Vol. 10, Tokyo: Council of International Student Advisors of National Universities, 69-84.
- 高濱愛・田中共子 (2009a) 「アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習の試み—アサーションに焦点を当てて—」『異文化間教育』30, pp.104-110.
- 高濱愛・田中共子 (2009b) 「在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用—留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合—」『留学生交流・指導研究』Volume 11, pp.107-117.
- 高濱愛・田中共子 (2009c) 「アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習セッションの試み—対人関係の開始に焦点を当てて—」『留学生教育』14, pp.31-37.
- 田中共子・高濱愛 (2008) 「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャル・スキル学習：大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』49, pp.31-48.

American Social Skills Learning for English Trainees

TAKAHAMA, Ai & TANAKA, Tomoko

The authors of the paper held a useful American social skills session for Japanese students planning to study English in the U.S. for pre-departure training. In this paper, the outline of the session and the students' responses to the session are reported. Four students participated in the session, and they learned four American social skills including "assertion" using two role-plays for each skill. According to the students' answers to the questionnaire after the session, it was found that they made efforts to improve their performances. Moreover, because they tried to adapt more effective attitudes and ways of cognition, they realized their own performances improved by joining the session. Lastly, regarding the results of their performance evaluation, there was a rise in their confidence and understanding of the importance of "assertion" after participating in the session. Therefore, it was inferred that the session assisted in familiarizing the students with cognitive and behavioral attitudes used within the American culture.